

責任ある言葉を伝えたい

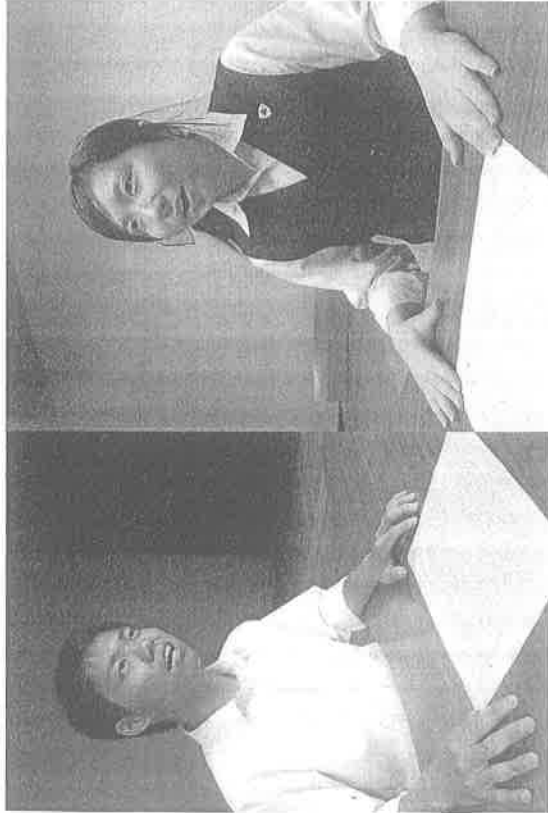
いばらき総文弁論部門大会に出場する

高の4校のみ。衰退の一因には、昭和40年代ごろからの経済的な豊かさや世界や社会で起きている出来事より個人の生活が重視されたことにあるという。そんな中、「偉い物の話や受け売りでなく、当たり前のことを斬新な切り口と意外な展開で聴衆に伝えるのが弁論の魅力」と話すのは、総文祭弁論部会事務局を務める水海道一高弁論部顧問の渡邊克也さん(51)。立場

弁論部を復活させ、全国屈指の強豪に育て上げた。生徒に身近な関心事を問いかけてテーマを決めさせ、読書やインターネットでテーマに潜む問題の原因などを掘り下げ、背景を分析。論点があいまいな時は部員同士でディスカッションを行い、論旨の焦点を定める。また、当事者への取材も行い、半年以上かけて4000字詰め原稿4枚半に原稿をまとめ、何度も推敲していく。

が今年に入ってから同高OBが運営する水海道フィルムコミッションに惹きつけられ、歴史ある建物が数多く残る街並みの魅力や市民ボランティアのおもてなしが都内のロケ隊をリピーターにするなど、何よりボランティア自身が生き生きと活動する姿を目の当たりにした。そして「フィルムコミッションは街おこしの手段であって目的ではない」というOBの言葉に、「自分も地域の一員

たかはし すぐる 高橋 卓さん
たかはし すずか 高橋 涼香さん



リハールに熱が入る高橋卓さん(太田一高)と高橋涼香さん(水海道一高)

「第38回全国高等学校総合文化祭・いばらき総文2014弁論部門大会」が、29日(火)と30日(水)土浦市民会館で開かれ、茨城県内の弁論部から二人が出場する。テーマを決めて半年かけて学び、調べ、時に当事者への取材を交えて原稿を練り直して伝える7分間のスピーチ。自分の「伝えたいこと」を通して、地域への貢献や将来の夢に向かってまい進することを学んだ高校生の熱い主張が会場にこだまする。

戦後に民主主義が浸するとともに活発化し、かつては「県内どの高校にもあった」という弁論部は今や県内で土浦一高、水戸麗業高、太田一高、水海道一

を代えて論理的な優劣を競う欧米のディベートにはない「自分が信じるテーマを伝える力」を身に付けてほしいと、9年前同校に赴任した当初は休部状態だった

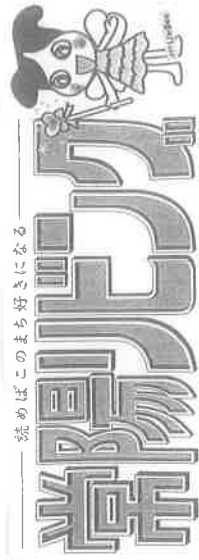
47年ぶりに地元開催となった総文祭の弁論大会には、全国から67人が出場する。

◇
水海道一高弁論部の高橋涼香さん(立)のテーマは、地元の街おこしや地方都市の過疎化問題を扱った「未来を拓く私たちの物語」。昨年の総文祭で長崎を訪れた際、東京からイタリーして「地域町おこし隊」で活躍する人に偶然出会い、執筆を開始した。初稿ではテレビドラマやB級グルメなどの影響で一時的に盛り上がる地方都市の例を引き合いに水海道の現状と課題などを書いた

として故郷をどうにかしたい」と思い始めた。常日頃から顧問の渡邊さんに「弁論で大事なことは良い主張をすることよりも自らの発言に責任を持つこと。言うだけ言っても行動しないのではだめ」と言われていること。もあって中学以来参加していなかった町内会の祭りや盆踊りの裏方として汗を流した。当事者として地域の催しに参加することで「同じ祭りなのにいつもと違って見えた。子どもたちが喜んでくれるのが自分のことのようにうれしい」と話す。

◇
太田一高弁論部の高橋卓さん(立)のテーマは「エリス・ギャランティール未来の若者たちのために」。ある日の新聞でオーストラリアの若者失業対策「エリス・ギャランティール」の記事を目にし、「就活うつ」をテーマにしよう

うと決めた。就職活動で苦戦したいとこの話や来年就職活動を始める大学3年生の姉から聞く不安の声、日本の失業率や大企業に希望が偏っている現状、学校卒業や失業開始から4カ月以内のすべての25歳未満の若者に教育訓練や雇用を提供するユース・ギャランティールの制度を、原稿用紙に埋めていった。直接言及はしないが、「一番伝えたいことは『失敗を恐れずにやってみよう』というメッセージ。自身は理料系の大学に進学し、将来は食品会社の研究職になりたいという夢がある。ある意味、未来の自分にあてたメッセージでもある言葉」を、本番で熱く語りかけた。弁論大会は29日(火)と30日(水)土浦市民会館大ホールで開催する。出場時間等の詳細は「いばらき総文2014」で検索。



2014
7/26

発行所 常陽リビング社
〒300-0832土浦市桜ヶ丘町7-10
tel:029-824-7111(代表)
fax:029-824-8443